

Title	蠅の王と四人の少年たち
Author(s)	川口, 能久
Citation	Osaka Literary Review. 21 P.75-P.87
Issue Date	1982-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25627
DOI	10.18910/25627
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

蠅の王と四人の少年たち

川口能久

少年たちをのせた飛行機が太平洋の無人島に不時着する。大人のいない世界で、彼らは隊長をえらび、規則をつくり、秩序ある社会をきずこうとする。こうした試みは失敗に終わるが、最終的に少年たちは救出される。このようなストーリーからもあきらかなように、ゴールディングの『蠅の王』は、少年冒険物語としての一面をもつ。物語の舞台となる無人島は細部にわたって写実的にえがかれ、ゴールディングの教師としての経験が生かされているのであろう、¹⁾ 少年たちは実に生き生きとした具体性をそなえ、結末のジャックたちによるラーフの追跡は圧倒的な迫力をもって読者にせまる。わたしたちは、何よりもまずこうした物語のレベルでこの作品をとらえなければならない。

『蠅の王』は、しかしながら、単なる少年冒険物語ではない。この作品の形式をどうよぶかについては議論の余地があろうが、²⁾ いずれにせよ、『蠅の王』はきわめて多くの解釈の可能性をふくんでいるのであって、作中人物や事件は深い象徴性を帯びている。したがって、『蠅の王』を単に物語のレベルでとらえるだけでは不十分なのであり、この作品の中心的な意味が存在する、いわば、アレゴリカルなレベルでの理解を深めることこそ重要なのである。

『蠅の王』は様々な解釈の可能性をふくんでいるが、³⁾ わたしにはこの作品は何よりも人間そのもののあり方、つまり、時や場所を越えて人間の内奥に存在する悪、獣性、残忍性、破壊性、支配欲、そのものをテーマとしているように思われる。⁴⁾ 事実、『蠅の王』は一般に寓話とよばれているが、決して教訓的ではない。もし少年たちが殺されなければ、あるいは、サイモン之死によって少年たちが理性をとりもどし秩序ある社会を建設し

たとすれば、『蠅の王』は単なる教訓的寓話にすぎない。しかし、ゴールドディングはあくまで人間の悪そのものを見つめる。三人の少年が殺され、ラーフも死の直前まで追こまれる。そして結末に救いはない。ゴールドディングは悪に勝利をおさめさせているのである。「蠅の王」とは、このような悪の象徴に他ならないのであって、ゴールドディングは悪に対する様々な態度を四人の少年たち——ラーフ、ピギー、ジャック、サイモン——を通してえがいているのである。

以上のことからあきらかなように、『蠅の王』はジェイン・オースティンによって代表されるようなマナーズや人間関係をテーマとした伝統的なイギリス小説とは本質的にことなる。したがって、ゴールドディングがこの作品において伝統的な小説の方法とはことなった方法を用いたのはむしろ当然と言えよう。『蠅の王』にとって、いつ、どこで、といったことは重要な問題ではない。彼は無人島を舞台とすることによって、日常的世界をはなれ社会的制約をとりきった。そして本来無垢であるはずの子供を作中人物とすることによって、すべての人間に悪が存在することを強調するとともに、大人であれば複雑な形であられる悪をより単純な形であらわしたのである。こうしてゴールドディングはいわば実験室のような世界で悪を追求したのであるが、しかし、このことは同時に作品の舞台や作中人物に自ら制限を加えたのであって、その結果、作品の世界が限定され作り物という感じがつきまとうことは否めないのである。

物語の冒頭でラーフ、ジャック、サイモンの三人は、自分たちのいるところが島であることを確かめるため山に登る。山頂に立った彼らは、島がおおむね船の形をしていることを発見し、潮流のため船の形をした島が逆行していくような幻覚におそわれる。このエピソードは、少年たちの社会が進化するのではなくて退化していくことをしめしている。言い換えれば、『蠅の王』の時間は未来にむかって進んでいるのではなく、過去（原始）にむかって逆もどりしているのであって、ゴールドディングは少年たちから文明の衣を一枚一枚はぎとり、人間の赤裸々な姿、人間の内奥にひそむ悪

を暴き出しているのである。

言うまでもなく、少年たちは最初から野蛮人のように身体に粘土をぬり、豚を殺し、肉をむさぼり食うことに没頭していたのではない。獸性の権化とも言うべきジャックでさえ、はじめて豚を発見した時、ためらって殺せなかったのである。少年たちは理性的で、救出のための手段を考え、規則をつくり、秩序ある民主的社會をきずこうとする。知性、指導力においては、それぞれピギー、ジャックに劣るラーフが隊長にえられたのは、彼がほら貝をもっていったからであり、このことは少年たちがほら貝が象徴しているもの、すなわち、理性、民主的秩序を重視していたことを意味している。

しかし、少年たちはやがて悪の存在に気づき、そして犯されはじめる。人間の内なる悪は様々な形をとるが、最初「蛇のようなもの」「獸」として「ちびっ子」とよばれる年少の子供たちをおそう。會議の席で顔にあざのあるちびっ子が蛇のようなもの、獸に対する恐怖をうったえるが、ラーフをはじめ「大きい子」とよばれる年長の少年たちはその存在を認めようとはしない。おそらくこれは彼らの悪に対する感覚がある程度麻痺しているためであろう。しかし、獸の恐怖をうったえた顔にあざのあるちびっ子が火事のために行方不明となり、ちびっ子たちが小屋造りを手伝おうとはせず、ジャックを長とする狩猟隊が救出のための唯一の手段である狼煙を無視して豚狩りに没頭し、その結果、船に救助される機会を失い、更に小屋と狼煙を重視するラーフと肉と豚狩りを強調するジャックとの対立が深まり、社會の秩序が乱れ、言いようのない恐怖におびやかされるに及んで、少年たちはそのような恐怖や獸について考えようとするのである。

ラーフは、何よりも常識をそなえた人間である。知性、指導力においてそれぞれピギー、ジャックに劣り、綽名をばらさないというピギーとの約束を反故にする彼は隊長としての資格に欠けるが、ほら貝によって象徴される秩序をまもり、狼煙による救出を最後まであきらめようとはしない。しかし彼はこの島には恐れるべきものは何もなく、獸は存在しないと主張

する。彼の常識では人間の内部に獣という悪が存在することが理解できないのであり、彼は敢えて理解しようとしないのである。

ピギーは肉体的にはまったく劣った人間である。ピギーという綽名がしめす通り、身体は豚のように太っていて、頭は禿げあがり、眼鏡がなければ目も見えず、喘息のために激しい運動もできない。しかし彼は何よりも知性をそなえている。そしてすべてのことを合理的に考えようとする。ほら貝を吹くことによって他の少年たちを集め会議を開くことを提案したのは彼であり、また、ラーフが論理的に考えることができず発言につまった時、助言をあたえるのも彼である。「どんなことにだって、頭のなかのことにだって医者がいるんだ」「人生は科学的なんだ」⁵⁾と彼は言い、ラーフ以上に強く獣の存在を否定する。多くの少年が幽霊の存在を肯定した時、ピギーが激しくその存在を否定したことからもあきらかなように、彼にとって合理的に説明できないものは存在しないのであって、彼もラーフ同様、人間の内なる悪を認めようとはしない。

ジャックはラーフやピギーとはまったくことなった人間である。彼はピギーがいみじくも直感したように、ピギーやラーフを憎悪し、彼らが信じているもの、すなわち、民主的秩序、狼煙による救出、知性とといったものをことごとく否定する。彼は人間の悪、獣性、破壊性、支配欲といったものをもっとも端的にあらわした人間である。「ぼくらは規則をつくってそれにしたがわなければならない。結局、ぼくらは野蛮人じゃないんだ。イギリス人なんだ」(p. 47) というジャック自身のことばにもかかわらず、顔に色をぬり豚狩りに狂喜する姿は、正に野蛮人そのものと言える。彼は食料を得るために豚を殺すと主張するが、むしろ豚を支配し殺すこと自体に陶醉している。獣に対する彼の態度は明快である。彼は狩人としての経験からこの島には怖がらなければならないような獣はいないが、もしそのようなものがいれば、狩りをして殺してしまうと主張する。彼はそうすることが可能だと考えている。つまり、彼は獣を人間の内なる精神的存在としてではなく、豚と同じような人間の外なる物質的存在としてしか考えてい

ないのである。

聖歌隊の一員として登場するサイモンは、一風変わった少年である。たとえば彼は一人でジャングルに行ったり、時として予言者の発言を行う。どちらかと言えば目立たない存在であり、ジャックによればいつも卒倒ばかりしていて、会議では自分の意見を十分に発表できない。このようなサイモンはある種の弱々しささえ感じさせる。しかし彼は獣、つまり、人間の内なる悪と対峙する勇気をもった唯一の人間である。彼はためらいながら、「もしかすると獣はいるかもしれない」と言う。「ぼくが言おうとしたのは…もしかすると獣はぼくたちのことにすぎないのかもしれないということなんだ」(p. 97)と彼は言う。彼は獣が狩りによって殺すことのできる人間の外なる物質的存在ではなく、人間の内なる精神的存在、つまり、「人間の根源的な病氣」(p. 97)であることに気付いているのである。

サイモンとはことなり、ラーフとピギーは獣の存在を認めようとはせず、大人がいればいいと考える。しかし、そもそも少年たちを避難させたのは大人の核戦争なのであり、大人の世界とは、いわば、獣の大群がひしめきあっている世界であることに気付こうとはしない。思いあまったラーフは「大人がメッセージを送ってくれさえすれば」「大人が何か大人の世界のもの、合図か何か送ってくれさえすれば」(p. 103)と必死になって叫ぶ。ラーフのこの願いはかなえられるが、皮肉なことに大人の世界から送られてきた合図とはパラシュートをつけた死体なのであり、この死体が獣となって少年たちをおびやかすのである。

パラシュートをつけた死体を最初に発見するのはサムとエリックである。彼らは死体が山頂でしゃがみこむようにして風の動きにあわせて体を動かしているのを目撃し、真実を確かめもせずにそれを獣と思ひこむ。そして彼らはラーフたちに「獣を見た」「毛でおおわれていた」「翼があったかもしれない」「目があった」「歯も」「爪も」「ぼくたちを追いかけてきた」「木のうしろをこそこそ動くのを見た」(pp. 109-110)などと報告する。もちろん、これらは単なる空想にすぎない。しかし少年たちは恐れていた

獣が実際に存在していることを聞かされて周章狼狽する。ジャック、ラーフ、ロジャーの三人は獣の存在を確かめるため山に登り死体を発見する。しかし彼らには獣の正体を見きわめるだけの勇気がない。言いかえれば、自らの内なる悪を見つめるだけの精神力を欠いているのである。サムとエリック同様、彼らも死体を獣と思ひこみ、他の少年たちもその存在を鵜呑みにしてしまう。ここで彼らは自らの内部にひそむ悪を獣として死体に投影しているのである。

ジャックは獣を人間の外なる存在としてもっとも強く意識し畏怖している。だからこそ彼ははじめ獣を殺そうとし、それができそうにないことを知ると豚の頭を獣にささげるのである。そして、この棒につきさされたまま「ぼんやりと目を開き、かすかに笑みをうかべ、歯と歯の間に黒くなった血を流している」(p. 151) 豚の頭こそ「暗黒への贈物」なのであり、人間の内なる悪を象徴する「蠅の王」なのである。つまり、ジャックをはじめとする狩猟隊の少年たちは、理性や民主的秩序を放棄し、蠅の王によって象徴される悪に身をゆだねたのである。事実、彼らはこれ以後本能のおもむくままに残忍な行為を繰り返すのである。

一方、常識と知性をそれぞれそなえたラーフとピギーは、獣の存在を疑いはする。しかし彼らはその正体を確認するための勇気をそなえてはおらず、結局のところ彼らも獣の存在を肯定してしまうのである。実際ピギーは獣から身を守るため救出のための唯一の手段である狼煙を山頂から海辺の高台に移すことを提案する。この提案は途方にくれていた少年たちによって即座に実行にうつされるが、このことはラーフやピギーをはじめとする少年たちが理性を失い、ジャックほどではないにしても、蠅の王、つまり、人間の内なる悪に支配されたことを意味している。

すでに触れたように、サイモンは人間の内なる悪と対峙する勇気をもった唯一の少年であり、獣が「人間の根源的な病氣」に他ならないことに気付いている。どんなに獣のことを考えてみても彼の頭の中には「英雄的であり同時に病的な人間の姿」(p. 113) しかうかばないのである。獣がいる

というラーフたちの報告に対する彼の態度はピギーのそれと著しい対照をなす。ピギーは獣の正体を確かめようともせず獣から身を守ろうとした。しかし、サイモンはその正体を確かめようとする。「山に登ってみるべきだと思ふんだ」「それ以外に仕方がないじゃないか」(p. 142)と彼は言う。彼の主張はすでに蠅の王に支配されている他の少年たちには受け入れられず、彼は一人で山を登り獣の正体を見破るのであるが、その前に彼は蠅の王と対峙する。そして、この場面こそ人間の悪をテーマとしたこの作品の正に核心なのである。

ジャックたちは蠅の王を獣にささげ一目散に逃げ出した。しかしサイモンは、目には「大人の世界の無限のシニシズム」をたたえ、「蠅、ばらまかれた臓腑、そして、棒に突きさされるといふ屈辱さえも無視して」(p. 151) 笑みをうかべている蠅の王を直視する。そして、彼は「わかっているよ」(p. 151)と声に出して言う。言うまでもなく、蠅の王が現実語りかけ、サイモンがそれに答えたのではない。彼は蠅の王に彼自身にも存在する人間の根源的な悪を投影させ、悪そのものと対峙しているのである。言いかえれば、この対話は蠅の王を直視するサイモンの頭の中で行われているのである。

A gift for the beast. Might not the beast come for it? The head, he thought, appeared to agree with him. Run away, said the head silently, go back to the others. It was a joke really — why should you bother? You were just wrong, that's all. A little headache, something you ate, perhaps. Go back, child, said the head silently. (p. 152)

サイモンはこのように自問自答し、「彼の凝視はあの古くからある、逃れようのない認識によって釘づけにされてしまう」(p. 152)そして、ついに彼は蠅の王の正体を看破する。

“What are you doing out here all alone? Aren't you afraid of me?”
Simon shook.

“There isn't anyone to help you. Only me. And I'm the Beast.”

Simon's mouth laboured, brought forth audible words.

"Pig's head on a stick."

"Fancy thinking the Beast was something you could hunt and kill" said the head. . . . "You knew, didn't you? I'm part of you? Close, close, close! I'm the reason why it's no go? Why things are what they are?" (p. 158)

こうしてサイモンは獣がすべての人間にひそむ根源的な悪であり、この悪こそがあらゆることがうまくいかなかった真の原因であることを認識する。蠅の王は自分のことは忘れて他の少年たちのように楽しくやろうと誘惑し、これ以上自分にこだわるとみんなで殺してしまうと警告するが、尚も直視するサイモンは豚の口のなかの「拡がる暗黒の世界」(p. 159)に呑み込まれて意識を失う。

獣が人間の内なる悪に他ならないことを知ったサイモンは、少年たちが獣として恐れているものの正体を確かめるため山に登る。そして、獣がパラシュートをつけた死体に他ならないことを発見する。彼はこの事実を他の少年たちに知らせようとするが、蠅の王の警告通り、文字通り獣と化したジャックたちによって獣とまちがわれ懐かな最期をとげる。

The sticks fell and the mouth of the new circle crunched and screamed. The beast was on its knees in the centre, its arms folded over its face. It was crying out against the abominable noise something about a body on the hill. The beast struggled forward, broke the ring and fell over the steep edge of the rock to the sand by the water. At once the crowd surged after it, poured down the rock, leapt on to the beast, screamed, struck, bit, tore. There were no words, and no movements but the tearing of teeth and claws. (p. 168)

しかし、サイモンの死そのものは、きわめて美しい。

Along the shoreward edge of the shallows the advancing clearness was full of strange, moonbeam-bodied creatures with fiery eyes. Here

and there a larger pebble clung to its own air and was covered with a coat of pearls. The tide swelled in over the rain-pitted sand and smoothed everything with a layer of silver. Now it touched the first of the stains that seeped from the broken body and the creatures made a moving patch of light as they gathered at the edge. The water rose further and dressed Simon's coarse hair with brightness. The line of his cheek silvered and the turn of his shoulder became sculptured marble. The strange, attendant creatures, with their fiery eyes and trailing vapours, busied themselves round his head. The body lifted a fraction of an inch from the sand and a bubble of air escaped from the mouth with a wet plop. Then it turned gently in the water.

(pp. 169-170)

ゴールディングはサイモンをキリスト的人物として意図したのであって、⁶⁾このようなサイモンの死にキリスト的イメージを読みとることもできる。しかし、この作品にサイモン、あるいは、サイモンのなものの復活による救いはない。サイモンの死が美しく浄化されているのは、彼のキリスト的聖性によるのではなく、むしろ自らの生命を賭してまで人間の内奥にひそむ悪と対峙した精神力、つまり、人間的な輝きによるのであって、ゴールディングはサイモンの人間としての勇気と行為をたたえているように思われる。

サイモンの死に対して、ジャック、ラーフ、ピギーは、それぞれことなつた態度をしめす。ジャックは狩猟隊の少年たちがサイモンを殺したことを認めようとはしない。彼は獣が変装していたのであって、サイモンを殺したのではなく獣を殺したのだと詭弁を弄し、サイモンを殺したのではないかと恐れる少年たちを納得させてしまう。こうして獣の正体を見抜いた唯一の人間を抹殺したジャックは「無責任な権威」(p. 176)をふるい、獣さながらにピギーやラーフの生命をおびやかすのである。

ラーフはサイモンを死に追いやったダンスに彼自身やピギーも加わっていたことを認め、サイモンの死を直視しようとする。つまり、彼は彼自身

の中にもジャック的なものが存在していることに気付きはじめてるのである。一方、ピギーはサイモンの死を直視しようとはせず「あれは事故だったんだ」(p. 173) と言って、彼自身がサイモンの死に関係していたことを認めようとはしない。それどころか、暗闇の中から這いだしてきたサイモンに責任があると批難し、サイモンのことは忘れなければならないとさえ言う。つまり、ピギーは人間の理性を信じるあまり、人間の内奥に獣がひそんでいることを認めようとはしないのである。言いかえれば、彼は人間の内なる悪と対峙する勇気を欠いているのである。

ジャックたちが豚の肉を焼く火をおこすためにピギーの眼鏡を盗んだ時、彼は眼鏡ではなく、ほら貝が盗まれたと考える。ピギーにとっては理性と民主的秩序を意味するほら貝も、獣と化したジャックにとっては単なるほら貝にすぎず、まったく何の意味ももたないことがピギーには理解できない。「槍をもって行くべきだ」「怪我をするぞ」(p. 189) という警告にもかかわらず、彼はほら貝をもって行き、その力でジャックから眼鏡をとりもどそうとする。しかしロジャーの落とした岩のために、ピギーの肉体はほら貝とともに文字通り砕け散るのである。

The rock struck Piggy a glancing blow from chin to knee; the conch exploded into a thousand white fragments and ceased to exist. Piggy, saying nothing, with no time for even a grunt, travelled through the air sideways from the rock, turning over as he went. The rock bounded twice and was lost in the forest. Piggy fell forty feet and landed on his back across that square, red rock in the sea. His head opened and stuff came out and turned red. Piggy's arms and legs twitched a bit, like a pig's after it has been killed. Then the sea breathed again in a long slow sigh, the water boiled white and pink over the rock; and when it went, sucking back again, the body of Piggy was gone.

(p. 200)

ピギーの死は、サイモンの死同様、凄惨である。しかし、ここにはサイモ

ンの死に見られるような美しさや崇高さは認められない。それどころか、ピギーという綽名を考える時、滑稽でさえある。ゴールドディングはここで最後まで人間の内なる悪を見つめようとはしなかったピギーを断罪しているのである。

ほら貝が象徴し、ピギーが求めていた理性と民主的秩序が崩れ去った今、とどまるところを知らない悪が少年たちを支配する。ジャックは唯一の邪魔者となったラーフに対して明確な殺意を抱く。人間の内なる悪は「蛇のようなもの」「獣」「蠅の王」と様々な形をとったが、ラーフを殺すため身体に粘土を塗り、手には槍をもち、叫び声をあげ、岩をおとし、火をはなつ少年たちは正に人間の悪そのものを象徴していると言えよう。

サイモン同様、ラーフも蠅の王を発見する。豚の頭は相変わらず棒につきさされたままにたにた笑っている。そしてラーフは「ほら貝と同じくらい白く輝いている頭」(p. 204)をじっと見つめる。しかし、その対応の仕方はサイモンとはことなる。サイモンは蠅の王を通して人間の内なる悪と対峙し、その正体を見抜いた。ラーフは「これは一体何だ」(p. 204)と考える。しかし「頭はすべての答を知ってはいるが、それを言おうとはしない者のようにラーフを見つめている」(p. 204)だけである。ラーフは恐怖と激怒と嫌悪にかられて頭を殴りつけはする。しかし、彼は「すべての答」を人間自身の中に見つけようとはしない。彼は蠅の王が人間の内奥に存在する悪であることを知ろうとはしないのである。

ラーフにとって、獣と化したジャックたちの追跡を逃れることはもはや不可能である。彼は文字通り死の直前にまで追い込まれる。「彼は倒れ、熱い砂の上をころげまわり、攻撃をさけようとして腕をあげて身をかがめ、慈悲を求めて叫び声をあげようとする。」(p. 220)ここでこの物語を終えることもできたはずである。しかし、ジャックたちがはなつた火を発見した海軍士官が突如としてあらわれ、少年たちは最終的に救出される。

言うまでもなく、この結末は決して単なるハッピー・エンディングでもなければ *deus ex machina* でもない。確かに、「ここのボスはだれなんだ」

という海軍士官の質問に「ぼくです」(p. 222)とラーフが答え、ジャックが反論しようとして止めたことは、ラーフ的な世界が回復されたことをしめしていると言えよう。しかし、少年たちが連れもどされるであろう大人の世界では、そもそも彼らを無人島へと追いやった戦争が行われているのであって、この結末に真の救いが無いことは明白である。

ゴールディングはここで無人島という実験室のような世界から現実の世界へ読者を引きもどし、新たな視点でこれまでの物語を再認識することを強いるとともに、大人に対して痛烈な皮肉をあげせかけているのである。海軍士官は「色粘土で身体に縞模様をつけ、手には先のとがった棒をもった小さな少年たち」をまるで異様なものを見るかのようにながめ、「戦争が何かやっていたのかい」(p. 221)と言う。しかし大人自身が少年たちと同じことをより大規模に、そして、より残忍な方法で行っていることに気付いてはいない。海軍士官の美しい制服と拳銃は、少年たちの色粘土を塗りつけた身体と先のとがった棒と基本的には何ら変わらないのである。

ラーフは人間の内なる悪に対して否定的であった。蠅の王に対する態度に見られるように、あえて内なる悪と対峙しようとはしなかった。しかし、最後の場面で彼は「無垢の終わり、人間の心の暗黒、そして、ピギーという名の真実で賢明な友人の転落」(p. 223)のために涙を流す。最終的に彼はサイモン同様、人間の内奥には逃れようのない悪が存在することを思い知らされたのである。そして、そのような悪を知らなかった少年時代にもう戻れないことに対して涙を流すのである。しかし、海軍士官にはラーフの涙の真の意味が理解できない。そして彼は戦争の象徴とも言うべき巡洋艦に視線をそそぐ。この時ラーフもかつてサイモンが蠅の王の口の中に見た「広がる暗黒の世界」を人間の心の中に見たのである。

言うまでもなく、悪が人間のすべてではない。しかし、悪は確実に存在し、その悪を取り除くことは不可能である。ゴールディングはこの否定し得ない現実を蠅の王と四人の少年たちを通してあらわしたのであって、『蠅の王』の世界は悪が支配する暗黒の世界である。しかし、すべての人が悪

に対してサイモンの態度をとれば、この物語の少年たちのように悪に支配されることはなく、逆に悪を支配することができる。おそらくゴールディングはサイモンの死を美化し浄化することによって、このことを意味しようとしたのであろう。

註

- 1) See William Golding, "Fable," *The Hot Gates* (London: Faber, 1970), p. 88.
- 2) 寓話とよぶのがもっとも一般的であろう。川口喬一『現代イギリス小説』（開拓社 1969）pp. 255-256 参照。
- 3) 詳しく言及する余裕はないが、多くの研究書・論文は主に次の観点から解釈している。(A)『珊瑚島』との比較。(B)作中人物・出来事の寓意。(C)キリスト教。
- 4) ゴールディング自身の意図については "Fable" 86-87 ページ参照。
- 5) William Golding, *Lord of the Flies* (Faber Paperbacks; London: Faber, 1958), pp. 91-92. 『蠅の王』からの引用は本書により、ページ数をしるす。
- 6) See Golding, "Fable," pp. 97-98.